

資本論の研究

種 瀬 茂 編著



青木書店

編著者

種瀬 茂 一橋大学学長・経済学部教授

執筆者

- 〔第1章〕 種瀬 茂
〔第2章〕 明石博行 東京造形大学非常勤講師
〔第3章〕 花田功一 小樽商科大学助教授
〔第4章〕 真田哲也 一橋大学大学院博士課程
〔第5章〕 宮沢俊郎 一橋大学大学院博士課程
〔第6章〕 福田泰雄 一橋大学経済学部講師
〔第7章〕 坂口明義 一橋大学大学院博士課程
〔第8章〕 桜井幸男 大阪経済大学講師
〔第9章〕 松石勝彦 一橋大学経済学部教授
〔第10章〕 中山孝男 一橋大学大学院博士課程
〔第11章〕 屋嘉宗彦 法政大学教授
〔第12章〕 小島 彰 一橋大学大学院博士課程
〔第13章〕 戸田雄幸 一橋大学大学院博士課程
〔第14章〕 頭川 博 高知大学人文学部助教授
〔第15章〕 滝田和夫 桃山学院大学経済学部助教授
〔第16章〕 浅利一郎 静岡大学人文学部教授
〔第17章〕 石倉雅男 一橋大学大学院博士課程
〔第18章〕 唐渡興宣 北海道大学経済学部助教授
〔第19章〕 松嶋孝雄 八幡大学法経学部助教授

資本論の研究

1986年1月20日 第1版第1刷印刷
1986年2月1日 第1版第1刷発行 定価 2900 円

編著者 種 瀬 茂
発行者 山 根 襄

発行所 株式会社 青 木 書 店
東京都千代田区神田神保町1-60
振替口座・東京 8-36582 番
電 話・03 (292) 0481 (代表)
郵便番号 101

© Shigeru Tanese, 1986 ミツワ印刷・高地製本
Printed in Japan

ISBN 4-250-86000-0

はしがき

現在、資本主義諸国は、国民生活を犠牲にしたとめどもない軍備拡張、大幅な財政赤字、資本主義諸国間の内部矛盾である危機的な貿易不均衡、発展途上国での債務累積、好況になってもはかばかしく回復しない失業、古くて新しい問題である貧困、農村や地方での過疎と都市での過密、ますます悪化する環境問題、たえまなき物価上昇、長時間労働と労働強化、合理化、省力化、減量経営、低賃金、核戦争による絶滅の危機など、多くの諸矛盾をかかえている。これらの諸矛盾は資本主義社会の経済的運動法則そのものから生まれた内在的諸矛盾である。

これらの諸矛盾を説明することこそ、政治経済学の課題である*。そのための基礎理論を提供するのが、資本主義経済一般の経済的運動法則を説明する『資本論』である。『資本論』はいまから百年以上前に書かれたものであるが、その生命力はいまだに失われていない。資本主義は帝国主義段階に入っているが、いぜんその基礎は不変であるからである。それどころか、資本主義経済の現実の歴史的発展経路は、ますます『資本論』の分析の正しさを証明している。『資本論』は、これまで多くの研究者によって精力的に研究されてきたにもかかわらず、いまだにきわめてくされたとはいいがたく、未説明の部分が多い。この『資本論』の未説明部分は、即現実の資本主義経済の運動法則の未説明部分でもある。両者はオーバー・ラップするのである。一例をあげると、『資本論』の資本主義的蓄積の一般的法則の説明は、即われわれの目の前にある資本主義経済の厳しい現実問題——失業と貧困——の説明である。

かつてあった『資本論』と現実とを直結する直結主義が反省されるあまり、これまで逆に『資本論』と現実とが切り離される傾向があった。宇野弘藏氏の三段階論がその典型である。しかしわれわれは理論を現実から切り離し、理論をひからびたものにしてはならないと考える。たしかに一から十まで理論と現実を直結する極端な直結主義は誤り

凡 例

- 一、マルクス・エンゲルス全集からの引用頁は、(全集②二三一)のように原頁で示す。
- 一、『資本論』からの引用頁は、(KⅡ三二〇)のように全集版原頁で示す。なお、同書第一部初版およびフランス語版(ラシャートル版)からの引用頁は、それぞれ(初版K三〇)、(仏語版KⅠ二七八)のように原頁で示す。
- 一、『剰余価値学説史』からの引用頁は、(MWⅡ三〇七、メガ六四五)のように示す。前者は全集版の原頁、後者はMEGAⅡ^{3.2}Ⅱ^{3.4}の原頁である。
- 一、『経済学批判』からの引用頁は、『経済学批判』全集⑬三六)のように全集版原頁で示す。
- 一、『経済学批判要綱』からの引用頁は、(Gr五五五)のように旧ドイツ版の原頁で示す。
- 一、MEGAからの引用頁は、(メガⅡ^{3.6}二〇九八)のように原頁で示す。

者にも報告してもらった。各報告は全員でもって徹底的に討議し、問題点を洗いだした。それにもとづき各執筆者は何度も原稿を書き直して、ベストのものにした。とくに若い研究者の報告は数回に及び、原稿書き直しは五、六回にも及んだ。また、直接に参加できなかった遠隔地の執筆者の原稿は、編著者ならびに編集委員会が分担して丹念に読み、遠慮なくコメントし、問題点を指摘し、よりよい本にするよう多大の時間とエネルギーをつかった。既成の研究でも原稿を書き直して、協力していただいた。以上の過程で、執筆者各位に不快の感を与えたかもしれぬことをここに率直にお詫びし、それにもかかわらず、原稿改善にご協力いただいたことに心から感謝したい。これもひとえに本書をいいものにするためである。共同執筆にしては珍しく、最終締切り日より五カ月半遅れただけで全員の改訂稿が出そろったのも、執筆者諸氏の熱意とご協力のおかげである。編著者・編集委員会と執筆者との見解がくいちがった場合には最後まで調整につとめたが、どうしても折り合わない場合には執筆者の主張のまま残した。そのほうが多彩な執筆者の創意工夫や個性や積極説を生かせると判断したからである。

編著者は目下学長の要職にあり、多忙をきわめ、それがために実際の編集の仕事は編集委員会が中心となって行った。編集委員会のメンバーは、松石勝彦、福田泰雄、寺西俊一、明石博行、戸田雄幸、中本悟、中山孝男、小島彰、岡田信子である。最後に、今日の困難な出版状況のもとで、このような「大著」を快く引き受けて、推進して下さった青木書店および編集部のお桜井香氏に心から感謝のことばをささげたい。

一九八五年二月一六日

編 著 者 種 瀬 茂
編集委員会代表 松石 勝彦

* 現代資本主義の諸問題の直接の解明は本書の姉妹書である種瀬茂編『現代資本主義論』（青木書店、一九八六年）で行う。
あわせて読んでいただきたい。

目 次

はしがき iii
凡 例 vi

I 資本の生産過程

第一章 商 品 論	2
-----------	---

一 商品論の課題	2
----------	---

二 商品の二要因と労働の二重性	5
-----------------	---

三 価値形態	9
--------	---

四 商品の物神性	13
----------	----

五 交換過程	15
--------	----

第二章 商品に表わされる労働の二重性	18
--------------------	----

一 問題の所在	18
---------	----

二 価値実体にかんするマルクスの多様な諸規定	19
------------------------	----

三 従来の諸見解	27
----------	----

四 論争点の解明	33
まとめにかえて	38
第三章 価値形態論	39
一 問題の所在	39
二 価値形態論の課題	39
三 価値形態の移行	45
四 価値形態論と交換過程論	53
第四章 価値形態論と価値実体論	57
——「回り道」をめぐって——	
一 問題の所在	57
二 「相対的価値形態の内実」の叙述構造 (1)	58
三 「相対的価値形態の内実」の叙述構造 (2)	62
四 価値形態の転倒的性格と価値実体	73
五 初版「回り道」規定の独自の意義——現物形態の「回り道」的性格	75
第五章 商品の物神性格とその秘密	78
一 問題の所在	78
二 商品の物神性格とは何か	79

三	商品の物神的性格の構造	84
四	むすび——第一章「商品」における物神性節	91
第六章	交換過程と貨幣の必然性	95
一	問題の所在	95
二	使用価値としての実現と価値としての実現の相互前提の困難	99
三	個人的過程と社会的過程の相互排除	102
四	一般的等価物の全面的想定の矛盾	104
五	矛盾の解決——貨幣の必然性	109
	むすび	112
第七章	貨幣の資本への転化	114
一	問題の所在	114
二	資本の一般的定式	116
三	一般的定式の矛盾	123
四	労働力の売買	128
	むすび	132
第八章	剰余価値論の構造	133

一 問題の所在	133
二 剰余価値概念の検討	135
まとめ	150
第九章 労働賃金	152
一 問題の所在	152
二 第六篇「労働賃金」の意義と位置づけ	152
三 労働力の価値または価格の労働賃金への転化	158
四 時間賃金と出来高賃金	164
五 労働賃金の国民的相違	166
第一〇章 資本主義的蓄積の一般的法則	169
—— 相対的過剰人口の累進的生産との関連を中心として ——	
一 問題の所在	169
二 『資本論』における相対的過剰人口形成の必然性論	171
三 相対的過剰人口の累進的生産と資本主義的蓄積の一般的法則	180
むすび	186

II 資本の流通と再生産過程

第一章 社会的総資本の再生産と流通……………188

——貨幣材料の再生産を中心に——

一 問題の所在……………188

二 マルクスおよび山田盛太郎氏の貨幣材料再生産論について……………189

三 宇野弘藏氏の貨幣材料再生産論について……………201

四 残された問題……………206

第二章 ケネー「経済表範式 (Formule)」とマルクス……………209

一 問題の所在……………209

二 「経済表範式」の構成と運動……………210

三 「前払」循環について——諸説の検討……………216

四 マルクスによる「経済表」解釈……………222

むすび……………228

第三章 再生産の均衡と不均衡……………230

——シスモンディを中心に——

一 問題の所在……………230

二 「円環運動」論における均衡・不均衡……………232

三 競争論における均衡・不均衡	240
むすび	246

III 資本主義的生産の総過程

第一章 費用価格と利潤	250
-------------	-----

一 問題の所在	250
二 資本主義的生産の総過程の基本規定	252
三 資本の三姿態に固有な資本機能	255
四 支出された資本価値の費用価格への転化	257
五 剰余価値の利潤への転化	261
むすび	266

第五章 価値の生産価格への転化問題	268
-------------------	-----

はじめに	268
一 問題の所在——マルクスにおける「価値の生産価格への転化」	269
二 ボルトケビッチの転化論	273
三 森嶋・シートンの転化論	277
四 総計一致問題の解決	283

むすび	291
第一六章 市場価値論の考察	293
一 問題の所在	293
二 市場価値論の位置	295
三 市場価値の規定	300
むすび	310
第一七章 「利潤率の傾向的低下の法則」の論証	312
一 問題の所在	312
二 利潤率の上限値の低下——「傾向的低下」貫徹の条件	314
三 利潤率低下の条件	322
四 相対的剰余価値率の上昇率と資金財の価値低下率との関係	328
むすび	333
第一八章 法則の内的諸矛盾の展開	334
一 問題の所在	334
二 概 説	338
三 生産拡張と価値増殖の衝突	341
四 人口過剰のもとでの資本過剰	343

五 追補——むすびにかえて	349
---------------	-----

第十九章 地代論	351
----------	-----

——差額地代と生産力の発展——

一 問題の所在	351
二 差額地代Ⅰの形成と自然的生産条件	351
三 差額地代Ⅰと上向序列	356
四 差額地代Ⅱと集約度の増大	360
五 生産力の発展と差額地代Ⅰの再編成	365

I 資本の生産過程

第一章 商品論

一 商品論の課題

『資本論』第一部第一篇「商品と貨幣」は単純商品生産関係の諸法則を解明している。すなわちその第一章「商品」では、交換されている諸商品の一つを取り出して分析し、商品の内容と形態が明らかにされる。つづく第二章「交換過程」では、商品と商品とが交換される過程そのものが分析される。これら第一章・第二章においては、商品が分析されると同時に貨幣の形成も明らかにされ、第三章「貨幣または商品流通」では、貨幣の諸機能が明らかにされる。以上のように第一篇「商品と貨幣」では、単純商品生産関係を分析し、これらの把握を基礎として次に、第二篇以下で資本の分析に進むのである。したがってこの第一篇は『資本論』全巻の序論にあたるわけである。

マルクスは『資本論』の冒頭で、「資本主義生産様式が支配している諸社会の富は、『商品の巨大な集まり』として現われ、個々の商品はその富の要素形態として現われる。それゆえ、われわれの研究は、商品の分析から始まる。」(KI四九)という有名な書き出しで、本文を開始している。いまこの第一篇第一章「商品」、第二章「交換過程」を一括して商品論とよべば、この商品論はまさに商品の分析にあてられているわけである。

ここで研究の対象とされている商品がどのような性格の商品か、資本主義的商品かそれとも資本主義社会以前にあった単純な商品か、をめぐって大きな論争がつづけられてきている。この問題に答えるためには、マルクスの「経済学の方法」を理解し、それに即して解答を見出すことが必要である。マルクスはそれを研究と叙述、下向法と上向法

として説明した。

『資本論』の最終目的は、資本主義社会の経済的運動法則の解明にある。『資本論』はその理論的体系の叙述である。そのためには前提として研究の過程がある。われわれは研究対象である資本主義社会を、客観的現実として目の前に置き、それを抽象し、分析し、与えられた表象の奥に、本質的なものをとらえ、それらを概念や法則としてとらえる。この作業過程が研究の過程である。こうしてえられた概念や法則を、抽象的なものから具体的なものへと体系的に展開して叙述する。この叙述された理論的体系が『資本論』であり、それによってわれわれは、資本主義社会の経済的運動法則を把握するのである。

そこで、この研究の方法に従って、われわれは、資本主義社会の現実を抽象し、その基礎にある最も抽象的本質的な生産関係としてとらえたものが、単純な商品生産の社会関係である。ここで単純なというのは、資本関係を抽象しているということである。資本、賃労働、剰余価値、利潤など資本の運動に特殊に関連ある事実を抽象する。そうすると単純な商品生産の社会関係をとらえることになる。

この単純な商品生産の社会関係とは、相互に独立した生産者たちが、その生産物を交換しあうことによって、自然発生的な社会的分業を形成している、そのような生産者の社会的関係である。そのなかで生産され交換される生産物が商品である。資本主義社会はこのような単純商品生産が全面的に発展した社会である。そこでまず、抽象的・基礎的な単純商品生産を分析し、しかるのち、より具体的な資本主義社会の分析へと上向する、という方法がとられるのである。

以上のように、ここ第一篇の商品論で分析されている対象は、現実の資本主義的商品であり、その資本的性格を抽象した単純な商品である。それではこの単純な商品と、資本主義社会以前に存在した単純な商品とは、どのような関連にあるのであろうか。事実マルクスは、第一篇の商品論において、資本主義的商品とともに、資本主義以前の商品、数多く例示して分析している。また、第一篇において単純な商品・貨幣を分析した後、第二篇「貨幣の資本への